The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	明治初期パリ外国宣教会の語学書・エヴラール『日本語教程』（1874）研究序説
Author(s)	岸本, 恵実
Citation	語文. 2022, 119, p. 92-78
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95252
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

明治初期パリ外国宣教会の語学書・エヴラール『日本語教程』（1874）研究序説

岸　本　恵　実

1. はじめに

本稿は、幕末から明治にかけてカトリック日本再宣教を担ったパリ外国宣教会神父の一人、フェリクス・エヴラール（Félix Evrard, 1844-1919）による、『60課の日本語教程第 1 部』（*Cours de langue japonaise, en soixante leçons. pt.1,* 1874）の基本書誌、典拠、日本語のローマ字綴りを示し、研究序説として位置付けるものである。以下、パリ外国宣教会（Missions Etrangères de Paris）を MEP、『60課の日本語教程』を『教程』または『日本語教程』と略記する。また人名のカタカナ・欧文表記は原則として『日本キリスト教歴史人名事典』に、現代フランス語の発音記号は『ロベール仏和大辞典』によった。

本書は渡辺（1897）福井（1907）など古くから目録類に見え、西洋人による日本語学習書の一つとして知られていた。しかし研究はほぼなく、最も詳しいのは松村（1957）「「ませんでした」考」と思われる。『教程』に「ませなんだ」「ませんだ」「ませんであった」「ませんだった」「ませんかった」が混用されていることについて、「同一の書物にこのようないろいろの形が現れるということは、この書物の言語資料としての価値が少しあやぶまれるのではないか」「ブラウンやガラタマやサトウらの会話書に比して、少し資料的価値の低いことは否定することができないようである」とされている。このあと松村（1970）、金子（1995a）（1995b）などに取り上げられているものの、やはり詳しい紹介はない。安田（2008）はエヴラールおよび『教程』について言及するも、論旨の中心ではないため松村（1957）の補足にとどまる。そのほか外国語で書かれたものでは、Maës（1975）がフランス語による日本語研究目録に入れているが、その後研究はないようである。

一方、MEPの日本語学習、邦訳活動に関する研究は近年多くなっている。一部をあげると、ヴェンセスラウ・デ・モラエス（Wenceslau de Moraes）が引用したバレ（Balet, Jean Cyprien）著『日本語文法』を詳しく紹介した鰍澤（2019）のほか、プティジャン（Petijean, Bernard Thadée）の主導によるプティジャン版を解説した高祖（2012）、メルメ・ド・カション（Mermet de Cachon, Eugène Emmanuel）の著作

を中心としたル・ルー（2014）（2010）、琉球での活動を扱った宮里（2021）（2017）、福音書邦訳を論じた日沖（2016）などである。『教程』の研究はこうしたMEPの日本宣教史研究にも寄与するものと考える。

MEPの著作目録であるMoussay, et al.（2008）によると、宣教師来日から大正末年（1859-1926）の間で見てみた時、日本語文法書・辞書の主要なものは以下 5 点である。[1]

1866　メルメ・ド・カション『仏英和辞典』
1874　エヴラール『日本語教程』
1899　バレ『日本語文法』
1904　ルマレシャル（Lemaréchal, Jean-Marie-Louis）『和仏大辞典』
1905　ラゲー（Raguet, Emile）・小野『日本語文法要略』『仏和辞典』

これとは対照的に、日本人のフランス語学習書は学校等でのまとまった需要を背景に多数刊行されており、MEP宣教師によるものも少なくない。[2] エヴラールの後年の著作『和仏会話独案内』（1898初版～1908第八版）[3] もその一つである。

日本語学習書が比較的少ないのは、MEPでは原則として、来日後先輩宣教師に付いて日本語を学んでいたためと考えられる。シェガレ（2003：65）は、明治期のMEP宣教師たちがフランスで小神学校・大神学校と進んだ後の過ごし方を次のようにまとめている。

アジアの布教地から呼び戻された先生方の指導に従いながら、宣教への意欲を高め、助祭叙階の日に任命地を知らされます。司祭になり、旅立ちの時が来ると、仲間と親戚にかこまれて、殉教を賞賛するようなロマンチックな出立式の歌〔筆者注、pp.74-79に掲載〕を歌い、祖国に帰らないつもりで、親や兄弟と別れを告げ、長い船旅に出ます。一番遠い国、日本なら、二、三カ月後に上陸し、一、二年間、先輩の指導の下に日本語を学ぶ（まだ当時は日本語学校がありませんでしたので）と同時に、宣教の心構えを身に付けます。その後、日本人の伝道師とペアーを組んで、任命された地で巡回宣教を始めます。

日本語学習書が比較的少なかったのは、こうした方針のもと、刊行に経費・労力を割かなかったということであろう。ではなぜ『教程』は刊行されたのか、その背景を見ていきたい。

2.『日本語教程』の基本情報

2.1. 著者F.エヴラールについて

エヴラール神父に関する研究も多くはないが、若き日の原敬と一時期ともに過ごし後年まで交流があったこと、日本語に長けフランス公使館付通訳官を約20年務めたことなどから、神父としてだけではなく日本をよく知るフランスの一知識人として、多くの史料に名を残している。近年書かれたもので最も詳しいのは、反教会的フランス人画家ビゴーが諷刺画で批判した人物としてエヴラールを扱った山梨（2010）である。そのほか『日本キリスト教歴史人名事典』、MEPフランスアジア研究所（IRFA）のwebサイト[(4)]、武内編（1995）、MEP日本文書目録（*MEP JAPON 1839-1872*[(5)]）、青山（1977）、原（1881頃）により、『教程』に関わる事項を中心にまとめたのが以下の略年表である。〈　〉内に日本カトリック教会に関する重要な事項を追記した。

1844　2月フランスのメッス司教区ラ・マスクに生まれる
〈1844　4月MEPフォルカード（Forcade, Théodore-Augustin）神父琉球到着〉
1864　MEP入会
〈1865　3月長崎にてキリシタン信徒発見〉
1867　6月司祭となる　10月長崎到着
〈1868　4月明治政府、キリシタン禁制高札掲示（五榜の掲示）〉
1868　1月15日横浜到着、6月函館へ
1869　9月横浜へ
1871　5月新潟へ
〈1873　2月24日キリシタン禁制高札撤去〉
<u>1874　3月横浜にて『教程』序文執筆、3～4月刊行</u>
　　4月19日横浜より『教程』送付、4月21日原敬とともに新潟へ
1875　5月 東北地方へ旅行の後、横浜へ
　　フランス公使館付き通訳官としても務める（1893まで）
1878　築地教会主任司祭となる
この後、神田教会、麻布教会などで務める
1882　日本政府より勲五等雙光旭日章授与
1886　『桃太郎』（ちりめん本）仏訳刊行

1898　『和仏会話独案内』初版刊行
1900　仏国政府よりレジオンドヌール勲章授与
1903　『大司教金祝式補佐司教授品式紀念演説集』刊行（編者）
1904　MEP日本副管区長となる
1906　東京大司教区の日本副司教となる
1917　日本政府より勲四等瑞宝章授与
1917　『日本パリ外国宣教会出版目録』刊行（共編者）
1919　横浜にて死去

エヴラールが『教程』を刊行したのは、日本カトリック教会の大きな節目の時期にあたる。マルナス（1985：435）によると、1873年 2 月に禁教の高札が撤去された後、プティジャンはすぐパリへ電報を打ち宣教師15名の派遣を要請した。[(6)]『教程』の刊行目的は、序文には書かれていないが、このようなまとまった人数の来日宣教師の日本語学習に急ぎ対応するためだったと考えられる。エヴラールは序文で、健康状態が良くなく仕上げが十分できなかったと述べているが、無理を押して新潟・横浜を往復し印刷を完了させたのも上の目的のためであろう。松村（1957）が指摘し、本稿でも後述するように、本書に不統一や錯誤が散見されることも、編集・校正に十分時間をかけられなかったことが大きく関係していたと推測される。

『教程』の成立事情は稿をあらためて述べることとし、以下では『教程』そのものおよび典拠について記述する。

2.2. 『日本語教程』の書誌と構成

『教程』は現在、少なくとも以下の所蔵 8 本が確認される。現存本はすべて第 1 部（1 ～30課）のみである。第 2 部（31～60課）刊行が計画されていたことは標題などから明らかであるが、刊行はされなかったようである。

早稲田大学洋学文庫、東洋文庫、上智大学キリシタン文庫（2 部）、国立国会図書館、京都外国語大学、横浜開港資料館、パリ外国宣教会図書館

本稿での引用は、画像がweb公開されている早稲田大学本（請求記号「文庫08 C1271 = 特」）によった。ただし、原本に見られる書体の違いは統一した。紙幅の都合上原文引用の多くを省略したため、できれば原本画像とあわせてご覧いただきたい。

構成は諸本により若干異なるが、早稲田大学本・東洋文庫本・国会図書館本・横

浜開港資料館本では以下の通りである。

標題紙（1 葉）
序文（(I) -VI）
正誤表（1 葉）
本文（(1) -159）
語彙集（160-179）
動詞形容詞活用表（折り畳み附表 1 枚）
漢字カナ原文（一～十七）

印刷者は「Imprimerie de “L’ Echo du Japon”」である。“L’ Echo du Japon” は、山梨（2010）によると1870年に創刊された日本初のフランス語新聞であり、カトリック教会に好意的な新聞社であったという。

筆者が原本調査したのは東洋文庫（「XVII-12-E-56」縦 20.9 ×横 13.5cm）、上智大学（「KB 222：15」21.2 × 13.6cm、「KB 222：16」20.2 × 12.6cm）、京都外国語大学（「495.615 Evr」23.5 × 15.6㎝）の諸本である。構成上の大きな違いとして、上智大学本の 1 本（「KB 222：16」）と京都外国語大学本は末尾の漢字カナ原文（一～十七頁、 9 葉分）を欠く。この部分は縦書きの石版印刷であること、その他の活字印刷箇所と異なり薄い料紙を用いていることから、欧文部分とは別に印刷されたと考えられる。

諸本中、旧蔵者に関する注目すべき情報をいくつか記す。早稲田大学本は、フランス語が教えられていた横須賀造船所の旧蔵本である。西堀（1988：296）によると横須賀造船所では、エヴラールの先輩宣教師にあたるフューレ（Furet, Louis-Théodore）がフランス語を教えていたことがある。またキリシタン文庫の「KB 222：15」、横浜開港資料館本は著者エヴラールの献辞があり、前者はMEP後輩宣教師にあたるルマルシャレ宛、後者は新潟で交流のあったと思われるドイツ人ライスナー（Carl Emil Adolph Leysner）宛である。[(7)] また、キリシタン文庫の「KB 222：16」（漢字カナ原文を欠く方）は、語彙集のあとに書写者不明のノート 23 頁分があり、内容はアストン『口語文典』仏訳（1873）附録の仏和語彙集全文（pp.67-81）の写しである。これらはいずれも、旧蔵者がエヴラールの知人やフランス語母語話者であったことを示している。

次に序文を見ていきたい。序文は、刊行の経緯、『教程』の構成、日本語の綴り字概説、第 2 部の予告と読者への弁明、の順に述べられる。綴り字概説についてはま

とめて後述することにし、ここではその他の部分を概観する。

はじめに、この書が友人の一人のために作成され、その強いすすめで刊行されたことが述べられる。この友人が誰を指すのかは明らかでない。実際には、来日宣教師達への対応が目的と考えられることは先述の通りである。

続いて、本書が 2 部構成の第 1 部であること、話し言葉（langage parlé）のみを扱ったことが記される。

全60課あり（第 1 部は30課まで）、各課は日本語テキストに続き、フランス語による逐語訳・意訳、テキストに関する対話、学んだ語句の練習問題、最後に「理論と分析」（文法の解説）が置かれ、この順に学習することが勧められる。

綴り字概説のあと、動詞の活用については、一覧表で示すのみとし第 2 部で詳述することが予告される。そして、巻末にテキストの語彙集があることが述べられる。

序文の終わりに、第 1 部だけでは日本語学習は不十分であること、自分の健康状態が良くないため第 1 部に十分手を入れられなかったことを述べ、気づいた点を書き送ってもらえたら喜んで受け入れると締めくくっている。

2.3. 『日本語教程』の典拠『新鑑草』

典拠は明記されないが、テキストの底本は浮世草子『新鑑草』（1711 序）のうちの 2 話である。『新鑑草』について、『浮世草子大事典』（2017：492）の解説より抜粋する。

中国種の短編教訓集。全三三話。『古今小説』などの白話小説を思わせる出典が明示されるが、確実な典拠は確認できない。ただし、本文中には白話語彙が散見され、（中略）作者にある程度の唐話学の素養が認められる。（中略）作者を都の錦とする説もあるが、実作者とするには疑問が多く、編集者的な関与に止まろう。

『教程』に採用されたのは、第 1 ～ 9 課が巻一の二「楊敏成老母に孝を尽て宝を得る事」（老母から金銀の椀を求められた孝行者楊敏成の夢に官人の姿をした神のお告げがあり、ある廟前の傍らから金銀の器物を掘り出すという話）、第10～30課が巻四の二「楊白之金を還して福を得たる事」（購入した古仏壇から金子が出てきた楊白之は売主である関将に届けるが、御礼として贈られた古茶椀が高値で売れる。白之はその金をも折半にしようとするが、関将の窮状を慮ってその娘を嫁にするという話）である。

史料によると『新鑑草』は、エヴラール以前に日本入国を目指し琉球に滞在した

MEP 宣教師たちの日本語学習書であったことが明らかである。1867 年に来日したエヴラールは、先輩宣教師から『新鑑草』原本や、仏訳などの草稿を引き継いだ可能性が大きい。

琉球国の資料によると 1855, 56, 57, 60 年の琉球国評定所の日記に、四書や『経典余師』など他書とともに『新鑑草』の書名が見える。ハルブ（2020）によると、上記の時期琉球に居たのはジラール（Girard, Prudence-Seraphin-Barthélemy）、メルメ・ド・カション、フューレ、ムニク―（Mounicou, Pierre）、プティジャンの 5 人である。これ以前にも、琉球に滞在したフォルカード、ルテュルデュ（Le Turdu, Pierre-Marie）、アドネ（Adnet, Mathieu）の 3 人がいる。琉球における日本語学習と『教程』との関係、『教程』刊行の経緯は不明のところが多く、今後史料をもとに明らかにしたい。

『教程』第 1 課のローマ字本文と翻字を、『新鑑草』原文・『教程』掲載の漢字カナ原文と併記すると以下の通りである。

『新鑑草』巻一・十七裏原文　（　）はふりがなを表す。
楊敏成（やうひんせい）老母（らうぼ）に孝（こう）を尽（つくし）て宝（たから）を得る事
元（げん）の皇慶（くわうけい）年中（ねんちう）に。浙江（せきこう）といふ所に。楊敏成（やうひんせい）と申人有（あり）。一人の老母（らうぼ）に事（つか）へて。能（よく）孝（こう）を尽（つく）し。きはめて家（いゑ）貧（まづしき）と云（い）へども。母（はゝ）に貧苦（ひんく）を聞（きか）しめず。冨（とめ）る躰（てい）にもてなして云（いふ）やう。

『教程』一頁 漢字カナ原文
第一章 楊敏成老母ニ孝ヲ尽テ宝ヲ得ル事
元ノ皇慶年中ニ浙江トイフ所ニ楊敏成ト申人アリ一人ノ老母ニ事ヘテ能ク孝ヲ尽シキハメテ家貧ト云ヘドモ母ニ貧苦ヲ聞シメズ冨ル躰ニモテナシテ云ヤウ

『教程』p.1 第 1 課テキスト　〔　〕は筆者による翻字を示す。

Yōhinchei to you hitoga tochiyotta hahani cōcōwo itachimachite tacaramonowo teni iremachita hanachide gozarimas’.

Ghenno Cōkei to you nengōno djibounni Chekicō to you tocoroni Yōhinchei to you hitoga gorzarimachitaga hitorino tochiyotta hahani ts’cayemachite yocou cōcōwo

ts’couchimachite iyewa binbōde gozarimas’ keredomo hahani couroucheii cotowo kikachemachedz’ canemotchino gotocouni chite mōchimas’niwa
〔楊敏成という人が年寄った母に孝行をいたしまして宝物を手に入れました話でございます。
元の皇慶という年号の時分に浙江という所に楊敏成という人がございましたが一人の年寄った母に仕えましてよく孝行を尽くしまして家は貧乏でございますけれども母に苦しいことを聞かせませず金持ちの如くにして申しますには〕

『教程』の漢字カナ原文は、漢字の字体に一部異同があるが、原則として『新鑑草』版本のふりがなを省略しひらがなをカタカナに変えたものである。そのため『新鑑草』に用いられた白話語彙、たとえば「造化（しあはせ）」（一頁、第 2 課）や「只顧（ひたすら）」（二頁、第 4 課）などは、ふりがな無しで引用されている。テキスト本文では、原文の内容をほぼ省略せず、「ございます」の口語敬体にあらためている。各課のテキストはしばしば、第 1 課のように文の途中で区切られる。

テキストの後、序文の通り、テキストとフランス語の対訳（逐語訳）、フランス語訳（意訳）、テキストに関する対話、練習問題、「理論と分析（解説）」が続く。対話・練習問題では、テキストとは異なり、敬体・常体の文体が混在する。対話はテキストに関するフランス語による問いに日本語で答える形式であるが、第 11 課以降、日本語による問いも交える。

語彙集は 1 ～30 課の日本語から 597 を立項し、品詞・仏訳や解説などを付したものである。活用する語の見出しは「Adz’ cari, carou, catta,〔預かり、かる、かった〕」「Atarachii, chiki, chōū, chikou,〔新しい、しき、しゅう、しく〕」のように、活用形を示している。

附表の動詞形容詞活用表は、動詞・形容詞に「ます」「なさる」を加えた活用の一覧である。下部の備考欄には、第 2 部で不規則動詞を扱うことが予告されている。

正誤表は 2 頁にわたり、アルファベットの明らかな誤植だけでなく分かち書きや符号の訂正も含んでいる。しかし本文には、正誤表で正されない誤植、とくに日本語文での符号の脱落が少なくない。日本語文では、誤植の類だけでなく、文法上不自然な箇所もしばしば見受けられる。特に、以下の例のように助詞「は」「が」に関わる箇所が目立つ。(8)

『教程』p.64（第15課テキスト）　下線は筆者による。
Ano bouts’danwa docosoconi orimass’rou Couanchō to you hito<u>wa</u> watachini

ourimachitanode gozarimas
〔あの仏壇はどこそこにおりまする関将とゆう人は私に売りましたのでございます〕
『新鑑草』巻四・一裏
右の仏壇は其丈（そんでう）其（そこ）に居さふらふ関将（くわんしやう）といふ人我に賣られたり

『教程』p.82（第18課練習問題）
Go yos' ga icagade gozarimas'.〔（あなたのご両親の）ご様子がいかがでございます〕
仏訳　Commet vont-ils?〔「彼らはお元気ですか」の意味〕

3. 日本語の綴りについて

本節では『教程』の日本語ローマ字綴りの概要を示し、他のフランス母語話者向日本語学習書 5 点との比較を行う。ローマ字綴り一覧は以下の通りである。「/」を付したものは、左側が主たる綴りであることを表す。右側を空白にした仮名は本書に用例がないと思われるものである。いわゆる四つ仮名の区別はないので、ダ行のぢ・づは（　）に入れ、ザ行のじ・ずのところにまとめた。

短音節・直音
あ a い i/ï う ou え ye お o
か ca/ka き ki く cou/kou け ke こ co　　が ga ぎ gi ぐ gou/ghou げ ghe ご go
さ sa し chi す s' せ che そ so　　ざ za じ dji/ji ず dz' ぜ dje ぞ dzo/zo
た ta ち tchi つ ts' て te と to　　だ da（ぢ づ）で de ど do
な na に ni ぬ nou ね ne の no　　ば ba び bi ぶ bou べ be ぼ bo
は ha ひ hi ふ fou へ he ほ ho　　ぱ pa ぴ pi ぷ pou ぺ pe ぽ po
ま ma み mi む mou め me も mo
や ya ゆ you よ yo
ら ra り ri る rou れ re ろ ro
わ wa を wo
ん n

短音節・拗音
きゃ きゅ kiou きょ kio　　くゎ coua ぐゎ goua
ぎゃ ぎゅ ぎょ ghio

しゃcha しゅchou しょcho
じゃdja じゅdjou じょdjo/jo
ちゃtcha ちゅtchou ちょtcho
（ぢゃ ぢゅ ぢょ）
にゃ にゅ にょnio
ひゃ ひゅ ひょ
びゃ びゅ びょ
みゃ みゅ みょ
りゃ りゅ りょrio

上記のうち序文で言及されたいくつかの音節と符号について、序文に書かれている順に補足する。項目ごとに抄訳し、〔　〕に本稿の筆者による注記を付した。

・〔句読点について〕
句読点は省略した。原文に近づけるためだが、批判は受け入れる。〔実際には、ピリオドがしばしば使われている。〕
・〔oおよびwについて〕
oは、単純なo（例、仏・oracle, obéissance. 日・ori〔折〕, odoroki〔驚き〕.）と、棒線付きのō（例、仏・eau, tableau, étau. 日・Cōcō〔孝行〕.）の二通りの発音がある。
直接目的語に付けられる助詞はwoと表記する。わずかな発音の区別を強調するためと、対格あるいは直接目的語であることを明示するためである。
・〔ouについて〕
Ouはfou, courageにおけるように発音される。〔現代フランス語ではそれぞれ［fu］［ku-Ra:ʒ］と発音されるため、この項目は短音のウの説明と思われる。長音や長短の別について説明はないが、本文ではしばしばウ列長音を表すのにcoufōū（工夫、第3課テキスト）のように二文字続けて付される。棒線がuだけに付されている箇所が少なくない。〕
・〔kについて〕
kはi, eの前と、活用語尾を表すkouにも用いる。

そのあと三項目続けて、発音の地域差に関する言及がある。

・〔cheについて〕

eが続くchは、arimachen’〔ありません〕のように単独の場合でも、cheifou〔政府〕のようにiの前に置かれている場合でも、地方によって発音の仕方が異なる。例えば、南部ではフランス語と同様に〔[ʃ]と〕発音される。江戸では、César〔[se-za:R]〕やcéder〔[se-de]〕におけるc〔[s]〕のように発音される。日本のその他の地域における特殊な変形については語らないでおく。

・〔couaについて〕

coua, couanの音は、たいていの場合、仮名に従い、書いている通りに発音されるが、江戸ではcaやcanに変わる。例えば火事の意味のcouadjiは、江戸ではcadjiとなる。またの国務院の意味のdaigjōcouan〔太政官〕は、江戸ではdaidjōcanとなる。

・〔yeについて〕

yeの最も普通である発音はその綴り通りだが、江戸の方言ではéternité〔[e-tɛR-ni-te]〕やcécité〔[se-si-te]〕におけるフランス語のéとほとんど同じものとなる。例えば遠慮、慇懃の意味のYenriôは、〔江戸では〕enriôとなる。

その後、アポストロフィの用法の説明が付け加えられる。

・〔アポストロフィ（’）について〕

アポストロフィは、ce〔[sə]〕、le〔[lə]〕、facile〔[fa-sil]〕、habile〔[a-bil]〕における無音のeと混同されるような、弱いou〔ウ〕を表す。

序文の概説は以上であり、網羅的なものではない。例えば先述したウ列長音や、促音を表すと思われる子音字の連続（tochiyotta〔年寄った〕（p. 1 第 1 課テキスト）、oschatte〔おっしゃって〕（p. 5 第 2 課テキスト））などは説明されない。

序文において参考文献はあがっていないが、『教程』の綴りは、他書の影響を受けているだろうか。エヴラールが参照しえた、フランス母語話者向けに刊行された先行日本語学習書には、ロドリゲス『日本小文典』仏訳（1825）、パジェス『日仏辞書』（1862-68）、ロニー（1865）、メルメ・ド・カション『仏英和辞典』（1866）などがある。

さらにもう一点、『教程』前年刊行のアストン『口語文典』仏訳が重要と思われる。本書では、原著アストンの英語式綴りがフランス語式に変えられている。仏訳者は、横浜のフランス領事館副領事（Chancelier du Consulat de France à Yokohama）であったクレッツァー（Kraetzer, Émile）である。[9] 印刷はImpr. C. Lévyとあり、レビーは『教程』を印刷したエコー・デュ・ジャポン社の社主であったから、[10] 時期・印刷

所の点で『教程』とごく近い関係にあったことは間違いない。

これら 5 点とエヴラールの綴りを比較すると、共通するところが多く影響関係は否定できないが、完全に同一である書はない。例えば、ザ行のジ・ズに対する dji、dz’ の綴りは『教程』独自のものといえる。アストン仏訳とはジを dji とする点が共通するけれども、『教程』では撥音のあと ji とする点、『教程』はズを dz’ としアストン仏訳は dzou とする点が異なっている。

『教程』
ジ dji：djiboun〔時分〕（p.1 第 1 課テキスト）
ジ ji：chenjits’〔先日〕（p. 95 第21課テキスト）
ズ dz’：canaradz’〔必ず〕（p.41 第10課テキスト）
ヂ dji：sobano djiwo〔そばの地を〕（p. 24 第 6 課テキスト）
ヅ dz’：ts’nedz’neni〔常々に〕（p. 6 第 2 課テキスト）

	ジ	ズ	ヂ	ヅ
ロドリゲス仏訳	zi	zou	dzi	dzou
パジェス日仏	ji	zou	dgi	dzou/zzou
ロニー	zi	zu	dzi	dzou
メルメ・ド・カション	ji	zou	dgi	zzou/dzou（語頭）
エヴラール『教程』	dji/ji	dz’	（dji/ji	dz’）
アストン仏訳	dji	dzou	dji	dzou

4. おわりに

『教程』は、浮世草子『新鑑草』を底本とした明治初期口語訳である点、フランス語母語話者による音写、翻訳、解説がなされている点に特色がある。本稿で指摘したジ・ズの綴り字以外にも他資料と異なる点が少なからず見受けられるが、それらが、なまの日本語の一面を捉えているのか、非母語話者によるバイアスを含むのかを見極めるために、他資料との比較が欠かせない。今後、関係史料の探索とあわせてテキスト解読を進めていく。

注

（1）フランス語・ラテン語学習書で日本語学習併用とみられるものが少なくないが、序文などから日本語学習の比重が大きいと判断したもののみをあげた。また、5 点のほかに小型辞書・専門用語辞書などがある。

（2）西堀（1988）の「フランス語研究書目：幕末・明治・大正・昭和（辞書・参考書・教科書）」参照。

（3）Moussay, et al.（2008）による。筆者が現存本で確認できたのは 1904 第六版までである。

（4）https://irfa.paris/missionnaire/0949-evrard-felix/（2022年 9 月30日閲覧）

（5）発信日・発信者・宛先・文書の要点・整理番号を記した目録である。筆者は写しを、マルタン・ノゲラ・ラモス氏（フランス国立極東学院）に見せていただいた。

（6）木鎌（2020）が1873年に実際来日した宣教師12人のリストを掲載している。

（7）1869-1882 年に新潟ドイツ領事を勤めた。青柳（2019：32）によると、エヴラールとライスナー、ドイツの商人ウェーバーとは、1872年新潟町より借地契約している。

（8）横浜開港資料館本には、正誤表によらない書き入れ訂正が多数あり、「は」「が」に関する箇所が多い。書き入れ者は不明である。

（9）楠家（2005：80-81）参照。

（10）澤（1998：95-107）参照。横浜開港資料館には「エコー・デュ・ジャポン」が1875年 5 月19日号から所蔵されているが、1875年 5 月20日号などの広告によると、1873年 7 月28日横浜の刊記がある。ポラック（2002：201）に1875年 8 月20日号の同広告が見られる。

参考文献

青柳正俊（2019）『川港の岸辺で：新潟ドイツ領事ライスナーの軌跡』（青柳正俊）

青山玄（1977）「新潟教区宣教小史（1972）」新潟カトリック教会『新潟カトリック教会百年の歩み：聖堂献堂 50 周年を祝して』（「カトリック新潟教会」の web サイト http://cathedral-niigata.jp/ に転載）

鰍澤千鶴（2019）「モラエスと日本語文法書」『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』27

金子弘（1995a）「西欧人の日本語研究書における動詞活用型の分類」近代語研究会編『日本近代語研究 2』ひつじ書房

金子弘（1995b）「西洋人の日本語研究における品詞の整理」『日本語日本文学』 5

木鎌耕一郎（2020）「宣教師から御雇教師へ：ジャン・バプティスト・アルテュール・アリヴェ」『日本カトリック神学会誌』31

楠家重敏（2005）『W・G・アストン：日本と朝鮮を結ぶ学者外交官』雄松堂出版

高祖敏明（2012）『プティジャン版集成解説：本邦キリシタン布教関係資料（1865-1873年）』雄松堂書店

澤護（1998）『横浜居留地のフランス社会』敬愛大学経済文化研究所

シェガレ、オリビエ（2003）「日本の宣教を再開したパリ外国宣教会の宣教師たち」森一弘企画監修『日本の教会の宣教の光と影』サンパウロ

武内博編著（1995）『来日西洋人名事典』日外アソシエーツ

西堀昭（1988）『日仏文化交流史の研究 増訂版』駿河台出版社

ハルブ, A著・岡村和美訳（2020）『奄美・沖縄カトリック宣教史：パリ外国宣教会の足跡』南方新社（原著 *Bulletin de la Société des missions étrangères de Paris 1925.*）
日沖直子（2016）「高橋五郎訳『聖福音書』をめぐって：明治のカトリック教会についての一考察」『アジア・キリスト教・多元性』14
福井久蔵（1907）『教育並に学術上より見たる日本文法史』大日本図書
ポラック、クリスチャン（2002）『絹と光』アシェット婦人画報社
松村明（1957）『江戸語東京語の研究 』東京堂出版（増補版1998）
松村明（1970）『洋学資料と近代日本語の研究』東京堂出版
マルナス、フランシスク著、久野桂一郎訳（1985）『日本キリスト教復活史』みすず書房（原著 Marnas, Francisque.（1896?）*La "religion du Jésus"*（*Iaso ja-kyô*）*ressuscitée au Japon dans la seconde moitié du XIXe siècle.* Paris: Delhomme et Briguet.）
宮里厚子（2017）「19世紀におけるフランス人宣教師の琉球滞在について：宣教活動と語学学習を中心に」『仏蘭西学研究』43
宮里厚子（2021）「琉球王国におけるフュレ神父の足跡：その学術的資料と手紙から読み解く」『島嶼地域科学』 2
安田尚道（2008）「「ませんかった」は横浜言葉か？：「ませんかった」の昔と今」『国語語彙史の研究』27、和泉書院
山梨淳（2010）「ジョルジュ・ビゴーと明治中期のカトリック教会：在日フランス人における反教権主義について」『日本研究』42
ル・ルー、ブレンダン（2010）「幕末期に来日した二人の仏人宣教師の日本語ローマ字表記について」『学校教育学研究論集』21
ル・ルー、ブレンダン（2014）「仏人宣教師メルメ・カションの『仏英和辞典』について」『帝京大学外国語外国文化』 7
渡辺修二郎（1897）『外交通商史談』東陽堂

『浮世草子大事典』（2017）笠間書院「新鑑草」（藤原英城筆）
『日本キリスト教歴史人名事典』（2010）教文館「エヴラール」（青山玄筆）
『ロベール仏和大辞典』小学館（1988）JapanKnowledge版

Maës, Hubert（1975）"Bibliographie des études de linguistique japonaise en langue française" *Travaux du groupe de linguistique japonaise*, II.
Moussay, Gérard et al.（2008）*Bibliographie des Missions étrangères : civilisations, religions et langues de l'Asie*. Paris: Indes Savantes.

引用資料

アストン（Aston, William George）
『日本語口語文典』仏訳（1873）：*Grammaire abrégée de la langue parlée japonaise par W.G. Aston.* traduite par Émile Kraetzer. Yokohama: C. Lévy.
エヴラール（Evrard, Félix）
『日本語教程』（1874）：*Cours de langue japonaise, en soixante leçons. pt.1.* Yokohama : L'Écho du Japon.

『桃太郎』（1886）: *Momotaro*. 東京：弘文社
『和仏会話独案内』（1898初版）: *Essai pratique de conversation franco-japonaise : d'après la méthode Robertson, à l'usage des Français et des Japonais Wa-futsu kwai-wa hitori annai.* Tokyo: Sansaisha.
『大司教金祝式補佐司教授品式紀念演説集』（1903）東京：エブラル
『日本パリ外国宣教会出版目録』（1917）：Papinot, Edmond, Évrard, Le P., Launay, Adrien eds. *Liste des ouvrages publiés par les missionnaires des Missions étrangères au Japon et par les prêtres japonais.* Vannes: mpr. de Lafolye frères.
パジェス（Pagès, Léon）
『日仏辞書』（1862-68）: *Dictionnaire japonais-français*. Paris: Léon Pagés.
バレ（Balet, Jean Cyprien）
『日本語文法』（1899）：*Grammaire japonaise*. Tokyo: Sansai-sha.
メルメ・ド・カション（Mermet de Cachon, Eugène Emmanuel）
『仏英和辞典』（1866）: *Dictionnaire Français-Anglais-Japonais.* Paris : Firmin Didot frères.
ラゲー（Raguet, Emile）・小野藤太
『日本語文法要略』『仏和辞典』（1905）：*Dictionnaire français-japonais; précédé d'un abrégé de grammaire japonaise.* Paris: E. Leroux. Bruxelles: Société belge de librairie.
ルマレシャル（Lemaréchal, Jean-Marie-Louis）
『和仏大辞典』（1904）：*Dictionnaire japonais-français*. Tokyo: Libr. Sansaisha. Yokohama: Libr. M. Nössler and Co.
ロドリゲス（Rodríguez, João）
『日本小文典』仏訳（1825）:Landresse, Ernest Clerc de, Rémusat, Abel. *Élémens de la grammaire japonaise*. Paris: A la Librairie Orientale de Dondey-Dupré Pére et Fils.
ロニー（Rosny, Léon de）
『和法会話対訳』（1865）: *Guide de la conversation japonaise*. Paris: Maisonneuve.

『新鑑草』（1711序）江戸升屋（川勝）五郎衛門・京都岡本半七（初版）
原敬（1881頃）「浮沈録」（原敬文書研究会編（1985）『原敬関係文書第四巻書類篇一』日本放送出版協会所収）
琉球王国評定所文書編集委員会編『琉球王国評定所文書』（1988-2003）ひるぎ社

謝辞

本稿は科研費JP17H02392, JP19K00626, JP20H01267, JP21F21303の成果の一部です。

本稿の内容は、二つの口頭発表、2022年 7 月23日第394回日本近代語研究会（オンライン開催）「明治初期パリ外国宣教会の語学書―エヴラール『日本語教程』（1874）について―」および2022年 8 月20日第16回キリシタン語学研究会「明治初期パリ外国宣教会の語学書・エヴラール『日本語教程』（1874）の人称代名詞について」（オンライン開催）と重なるところがあります。執筆にあたり、ご教示ご助力いただいた多くの皆様に感謝申し上げます。

（きしもと・えみ　本学教授）